

理想型をブラジルのインディオに求め、『グアラニー族 (O Guarani) 』 (1857年)、『イラセマ (Iracema) 』 (1865年)、『ウビラジャーラ (Ubirajara) 』 (1874年) のインディアニスタ小説3部作を執筆した。

その中でも、著者が“セアラーの伝承”と呼んだ『イラセマ』は、特筆に価する。

かのマシャード・デ・アシスをして“詩的散文”と言わしめたこの小説のヒロインであるイラセマは、“蜜の唇を持つ乙女”と形容され、ロマン主義における究極の女性像を与えられている。

ポルトガル人マルティンとの間に生まれた混血児モアシールは、ブラジル人のプロトタイプであり、イラセマは、“ブラジル人創造の母”として象徴的に描写されている。

ロマン主義及びインディアニズモは、19世紀後半には写実主義の前に衰退の一途を辿り、再び、インディオが小説で扱われるには、近代主義以降のマリオ・デ・アンドラーデ (Mario de Andrade) やダルシー・リベイロ (Darcy Ribeiro) の登場を待たねばならなかった。

2004年8月12日

主幹 田所清克
研究員 岐部雅之